みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　3　年　2月　26日　　NO.25

球音

先日、春の選抜高校野球の組み合わせ抽選会がありました。今春は、甲子園で高校野球が見られそうで、なんだか嬉しさを通り超えて、思わず涙が出ました。

　プロ野球も順調に準備が進んでいるようで、益々春の訪れが期待されます。

　最近は、野球よりもサッカ－のほうが小学生には人気があるとかないとか、昔と違って様々なスポ－ツに取り組む人がいて、いいなぁと感じます。Eスポ－ツと称して、テレビゲ－ムがスポ－ツ扱い。囲碁も将棋もスポ－ツの仲間入り。

「多様性」こそ成長の原点。素晴らしい流れだと思います。

年賀状だけのやりとりが30年近くになる友人がたくさんいます。ある友人の今年年賀状には、当時友人が勤めていた高校の野球部のユニホ－ム(その友人が監督をしていました)を赤ちゃん用に作り直して写真におさまる赤ちゃんと現在高校生になり同じ柄のユニホ－ムを切る高校球児の写真が並べられて届きました。なんと息子が成長してかつて父親が監督していた野球部に入っているとは。

この友人(「校長室から」第11号でうどんにしょうゆをダボタボ入れた人です)と出会ったころ、話をしていて驚愕したことを覚えています。

彼は、高校野球の名門校出身でした。甲子園にも何度か出たことがあったのです。そして、当時彼が所属していた大学の野球部は、神宮球場で日本一に。思えばのちに2000本安打を達成する選手がいたり、メジャ－リ－ク゜で活躍するピッチャ－がいたり。それはそれは。

彼はというと、私とそんなに体格も変わらない。足も速そうではない。そこで、ある時思い切って聞いたのです。

「おまえ、試合に出たことあるの」と。

恐るべし答えが返ってきました。

「ない。公式戦は当然、練習試合でもほとんどない。甲子園へ行ったけどスタンドだったし、神宮での日本一もスタンドから眺めた。それは、俺に実力がないから仕方のないこと。ただ。実力はなくても野球が好きだということは、だれにも負けないつもりだ。」

30年ぐらいの前の春のこと。国語の教師になりたいけれど社会科の免許しかなかった彼は、大学卒業後、聴講生として大学に残りました。なぜか同じ年なのに大学の4年生になった私とふたりで京都の西京極野球場へ。同じ野球部で彼と同期だった一つ年下の友人がプロに進み、その日投げるとか。ライトスタンドからベンチをのぞきますが、なかなか姿は確認できません。すると彼は、大声でその選手の下の名前を叫びました。それも何度も何度も。しばらくすると、ベンチからこちらに向かう人影が。

私たちを見つけると「なんやあんたか」と隣で声をからした彼に向って言いました。私は、その選手の経済学のノ－トを借りてなんとか単位を取っていたのでそのお礼を言いました。

「すまんな。投げるのは、明日の西宮や」とさわやかに言って走り去っていく背番号18番は、本当にまぶしく輝いていました。